

日本語教育現場への機械翻訳導入の可能性

—日本語母語話者教師を対象とした実態調査をもとに—

BALASOORIYA Udani

1. はじめに

文化庁は、2016年度文化審議会国語分科会において、日本語教育人材の養成や研修の在り方について検討を進めており、その検討結果を日本語教育人材の養成・研修の在り方として取りまとめている。そこでは、日本語教師養成における教育内容では、「効率的で創造的な日本語教育を行うために、学習管理や教材作成等に必要となるICT活用方法を知るとともに、情報資源の扱い方について理解する」、また日本語教師養成に求められる資質・能力では、「学習者の学習課程を理解し、学習者に応じた内容・教材（ICTを含む）方法を選択する上で、必要となる知識を持っている」、「学習者の自立学習を促進するために、ICT等の多様なリソースを活用した効果的な教育実践ができる」などと効率的で創造的な日本語教育を行うために、ICT等の多様なリソースを活用することを強く求めている。これと同時に、外国語学習のために使用される補助ツールは多様化している。その中で、外国語教育現場で注目されているのは、機械翻訳（machine translation 以下、MT）である。今までの外国語教育におけるMTの使用は大きく次の3つの時代に分けられる。

(1) 「BAD MODEL」の時代

2016年より前はパソコンに興味関心がある一部の外国語教員だけがMTを利用していた。また、そのころはMTの性能がそれほど良くなかったため、学習者が、母語から外国語への翻訳を、MTを使って行い、その中にエラーを見つけ、修正するという「BAD MODEL」としてMTは外国語教育に利用されていた。

(2) 「GOOD MODEL」の時代

2016年から2019年の間は、MTは著しく発展したため、「BAD MODEL」アプローチから「GOOD MODEL」アプローチに変わり、MTが正しいと

いう前提で、MTから学びを得ることで学習を促すことになった。Wiz and White (2019) は、MTはライティングで「GOOD MODEL」として使用することによって、語彙を豊富にする、作文の質を高める効果があることを説明している。

(3) 「遠隔授業」の時代

2020年以降は、コロナ禍による遠隔授業のため世界的に学習者のMTの使用が増加し、それによって、MTと外国語教育に関する実践的な研究や研究報告も徐々に増加している。そのため、語学教員のMTに関する関心も高まっているのではないと思われる。山田(2021)は、日本の大学における教養英語教育とMTに関するアンケート調査によって、日本の大学教員らは、MTを積極的に活用したいと考えていることが明らかにしている。

外国語教育とMTの現状をまとめると、MTは著しく発展していると同時に、以前と違って、外国語教育の現場に好意的に受け入れられて、積極的に使われるようになってきていると思われる。

本稿は、効率的で創造的な日本語教育を行うために、ICT等の多様なリソースを活用することが強く推奨されている中、日本語教育に携わる教員がMTをどのように考えているのか、MTを授業で活用しているか（したいか）を把握することを目的とする。

2. 先行研究

従来の日本語教育研究では、主に学習者の困難点の解明や教育方法の開発、評価基準・評価観点の検討などが進められている。しかし、近年外国語教育現場で補助ツールとして注目されているMTと日本語教育について研究は行われていない。しかし、外国語教育現場ではこれまで種々の調査によって、MT使用に関する教員の実態調査

が行われている。その中で、Clifford et al. (2013) は、デューク大学（米国）の学部生を対象に、第二言語（Second Language 以下、L2）コースにおける MT の使用状況、および L2 講師の MT に対する認識について実態調査をしている。L2 講師の 43 名を対象としたアンケート調査によって、教員の立場にある者には、学習者の MT 使用は容認しがたいと考えている者が多いことを明らかにしている。学生の MT 使用が不正に当たるか否かの質問に対して、教員の 42% が「不正に当たる」と「場合によっては不正に当たる」と回答した教員が 37% で、全教員の 79% が学生の学習目的の MT 使用をなんらかの不正と考えている。また、学習者の MT 使用を認めると回答した教員は 1 人もいない。外国語学習における MT 使用が効果的であると回答した教員は 7% のみであり、全体的に教員は、MT 使用に対して懐疑的かつ悲観的である。

教員の MT 使用に対する受け止め方に関して、初級学習者に MT の使用が役に立つと思うと回答した教員は 27% で、上級学習者であれば、MT は役に立つ可能性があるかと答えた教員は 54% である。また、MT の学習者の使用の有益性を否定している理由として、「学習者が MT の出力が正しいかどうかの知識を持っていない」ことを挙げる者が最も多い。しかし、上級学習者であれば、MT のエラーに気づき修正できると考えている教員が多く、外国語学習への MT 利用は、学習者のレベルによって異なるという興味深い結果が示されている。

他方、Jolley & Maimore (2015) は、大学におけるスペイン語学プログラムの学習者と講師を対象に、Google 翻訳と同様の無料オンライン MT の使用状況、認識を実態調査したものである。スペイン語講師の 39 名を対象としたアンケート調査結果は、先述した Clifford et al. (2013) の結果と同様に教員は全体的に MT の使用に対して悲観的である。また、学習者と講師の無料オンライン MT 使用状況を比較した結果、講師の方が学習者よりも無料オンライン MT の使用頻度が低く、一般的に MT の出力の信頼性と正確性に確信が持てないことが明らかになっている。また、無料オンライン MT の使用を非倫理的だと思う傾向が強

く、外国語学習の場における、無料オンライン MT の使用可能性についてより懐疑的であることが結果からわかる。しかし、学習者と講師の間には、無料オンライン MT を使った作文学習の倫理性に関して大きな意識の相違があり、学習目的や課題によって外国語学習への MT 利用が異なるという興味深い結果である。

海外では MT の存在意義を認めた上での外国語教育の在り方を、教育機関や教員が認識し始めていて、上述した Clifford et al. (2013) と Jolley & Maimore (2015) 等のように、学習者や教員の MT に対する意識調査を実施して現状を把握する研究が進められている。MT の存在は日本国内外の日本語教育現場においても無視すべきではないことは自明だが、両者の関係の明確化がこれまで十分に行われてきたとは言えない。そして、複数の母語を持つ学習者が同じ教室で学ぶ教育現場での MT の使用に関する研究がない。本研究は、このような先行研究の不備を補い、日本語教育現場への MT 導入の可能性を論じるものである。

3. 研究方法

日本語を母語とする大学の留学生センターおよび日本語学校の教員（専任・非専任は問わない）を対象として、MT の使用状況に関するアンケート調査を実施した。20 問で構成され、うち 4 問は回答者の属性に関するもの、1 問は調査結果の研究利用への同意を求めるといった設問であった。Google Forms を通じてオンラインで回答を収集した。宇都宮大学留学生・国際交流センターの協力を得て連絡を行い、また筆者の日本語教員の連絡網に告知をしてアンケートの協力を求めた。アンケートは同一の教員が異なる立場で複数の回答を行うことができるようにした。例えば、大学教員が日本語学校でも日本語を教えている場合、回答に想定する学習者が異なることを考慮し、それぞれの立場で回答してもらった。実施期間は 2022 年 5 月上旬から 2022 年 8 月上旬の約 3 ヶ月間であり、合計 30 人の回答を得た。このうち 28 人の回答が大学教員からであった。これは、連絡・依頼の方法と無関係ではない。

3.1 回答者のプロフィール

調査対象者は、次の 3 つの条件をすべて満たす

人に限定している。(1) 大学で日本語を教えている教員、(2) 留学生を対象に外国語としての日本語を教えている(専門科目ではない)、(3) 日本語を母語とする。28人の対象者のうち、10人が異なる大学の教員であり、教授歴は、10年以下が8人、10～20年が8人、20～30が7人、30年以上が5人と、さまざまであった。教員が教える学習者の日本語レベルについては、日本語能力試験(The Japanese Language Proficiency Test 以下、JLPT) N3合格程度が最も多く、JLPT N5~N1程度まで幅広い日本語レベルの学習者に教えていることがわかった。この結果は、大学留学生センターの日本語学習者の日本語能力のレベルをそのまま表していると思われる。

4. 結果

4.1 日本語の授業での MT の使用の現状

最初の質問群は、教員が MT をどのくらいの頻度で使用しているかに関する。まず、日本語の授業ではなく、日常生活においてどのくらい MT を使っているのかを尋ねた(図1)。14人(52.7%)が「使わない(全く・あまり)」と答えた。「たまに使う・ときどき使う」は13人(46.5%)だった。「頻繁に使う」と回答した教員1人(3.6%)であり、教員による MT 使用率は50%であることがわかった。

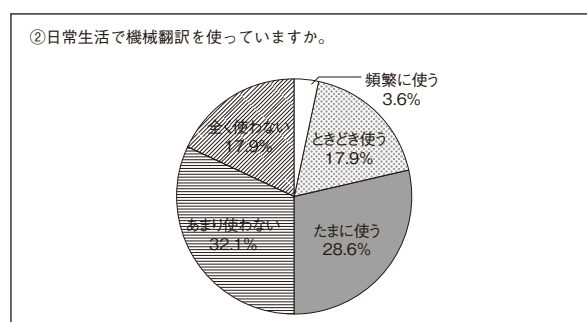


図1 教員の日常生活(授業ではない)の MT 使用頻度

次に、日本語の授業で MT を使用しているかどうかを質問した(図2)。「使わない(全く、あまり)」が21人(77.8%)であった。図1で示した日常生活で使わない人の数14人(約50%)よりも多い。データを個人別に見てみると、日常生活で「使わない」と回答した人はいずれも、授業でも「使わない」と答えていた。日常生活で「た

まに使う・ときどき使う」と回答した13人(図1)のうち、授業でも「使う(たまに・頻繁)」と答えたのは2人だけであった(図2)。また、「頻繁に使う」と回答した教員1人も授業では「たまに使う」と答えていた。いずれにしても、現状では21人(77.8%)の教員が、日本語の授業では MT を活用・使用していないことが確認できた。

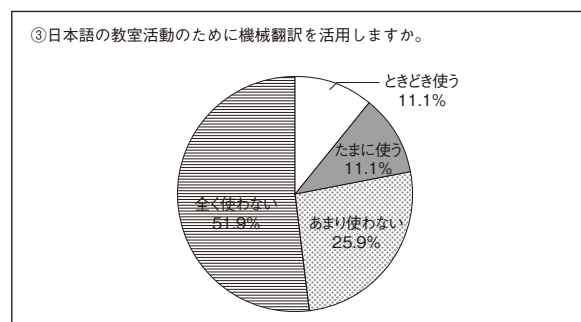


図2 日本語の授業での MT の活用・使用頻度

学習者が MT を使っている(と思う)かどうかを教員に尋ねた。正確な学習者の MT 使用率を知ることではなく、教員の主観を抽出することが質問の目的であった。回答は興味深く、24人(85.8%)が、学習者が日本語学習に MT を使っていると思っていた。

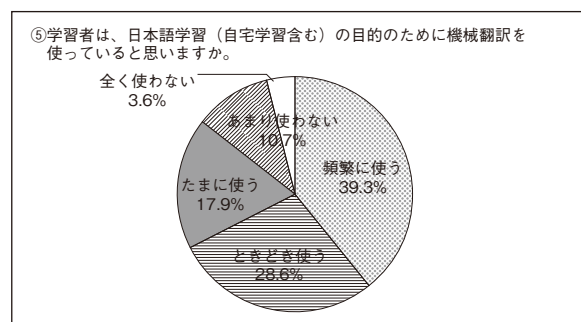


図3 学習者の日本語学習のための MT の使用頻度(教員の主観評価)

4.2 日本語教育のための MT について

前節は、MT 利用の現状に関してであったが、本節では教員が MT 利用をどう考えているのかを示す。まず、「利用すべきか、控えるべきか」について(図4)、「どちらとも言えない」が11人(39.3%)、次いで「利用すべきだ」が8人(28.6%)であった。「控えるべきだ」は、5人(17.9%)と少数だった。これに対して、「MT を利用・活用したいか」との問いには(図5)、「活用してみたい」が8人(28.6%)とその他では、既に MT

を使っている1人、条件が合えば使ってみたい2人を合わせて、11人が「活用してみたい」と回答しており、最も多かった。前の質問と合わせて考えると、「活用すべきか」と問われれば、「どちらとも言えない」が多く、MTの日本語教育利用については必須とまでは言えないものの、「活用したいか」と問われれば、多くの教員が「活用してみたい」と回答している。この点は、注目に値するだろう。

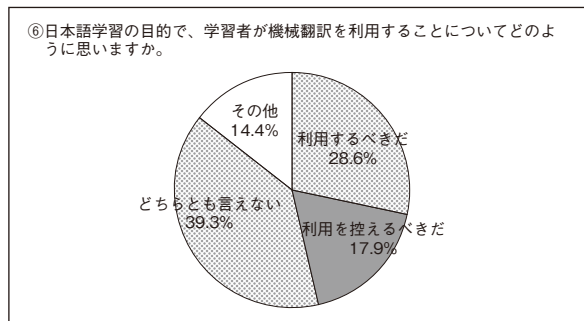


図4 MT 利用すべきか、控えるべきかに対する教員の回答

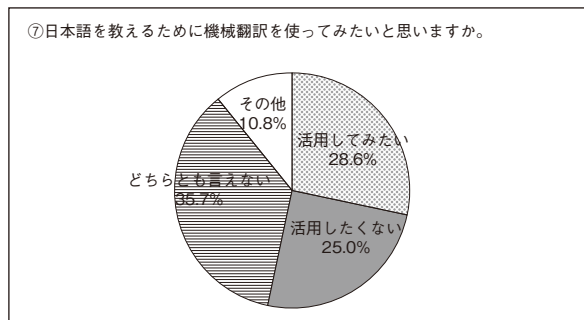


図5 MT を活用してみたいと考えている教員数

次に、「授業のために機械翻訳を使うとしたら、どのような活動に使いたいか。(複数回答可)」を尋ねた(図6)。機械「翻訳」という性質上、書く(11人、40.7%)、読む(7人、25.9%)の書記言語に関する活動への利用を望む回答が多かった。また翻訳のように直接的にMTの翻訳機能をそのまま利用する活動をしてみたいという教員の回答も多かった(6人、22.2%)。発表(プレゼン作成、スピーキングなど)での利用は難しいと一般的に思われがちだが、プレゼン作成と絡めた活用をしてみたいという回答数も多かった(10人、37%)。この回答は、MTを援用し、4技能の向上に絡めた教授法を開発する上で、どのようなニーズがあるかを確かめる資料となると思われる。

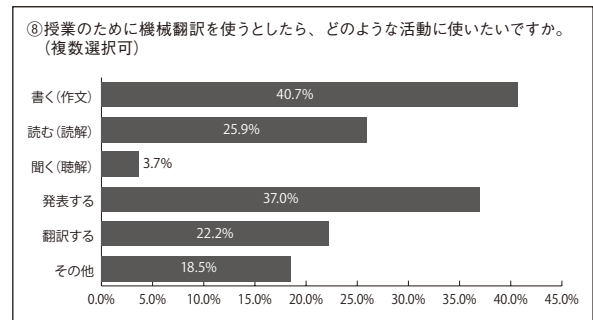


図6 MTの授業利用における活動

4.3 MTの実力

教員がMTの実力をどのように評価しているかに関する質問を試みた。最初は、判断基準を設定せず「母語が異なる留学生が、彼らの母語で入力し日本語に書き換える場合、機械翻訳の日本語は信用できますか。」と尋ねた(図7)。回答者の半数が「あまり信用できない」(14人、50%)と回答しているが9人(32.1%)が「ある程度信用できる」と答えた。また、数が少ないが「学習者の母語によって異なる」と思っている教員もいることが明らかになった。そして、回答の中に「とても信用できる」と回答した者が1人もいなく、「全く信用できない」と回答した人が1人しかいないことが興味深い点である。「ある程度信用できる」9人(32.1%)という見方と、「日本語教育にMTを活用してみたい」が8人(28.6%) (図5)とのほぼ同数であることは興味深い。

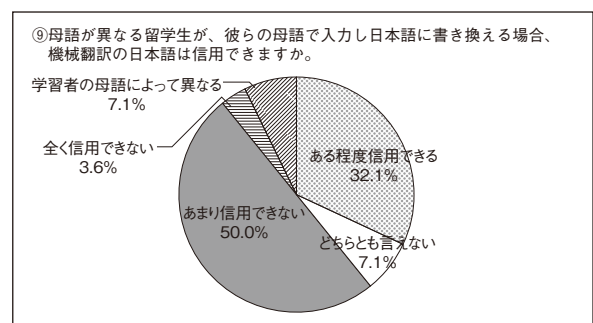


図7 MTの出力の信用

教員が学習者の日本語力とMTの日本語力をどう評価するかを調べたく、「機械翻訳の日本語力をどのように評価しますか。(翻訳結果に対する主観評価でお答えください。)」という質問をした(図8)。この質問に関しても、回答のための基準を特に設けていないが、15人(53.6%)の教員が「どちらとも言えない」と回答した。日常的にMTを

使用しない教員が大半である（図2）ため、学習者の日本語力だけでMTの出力を判断できないことが原因だと考えられる。

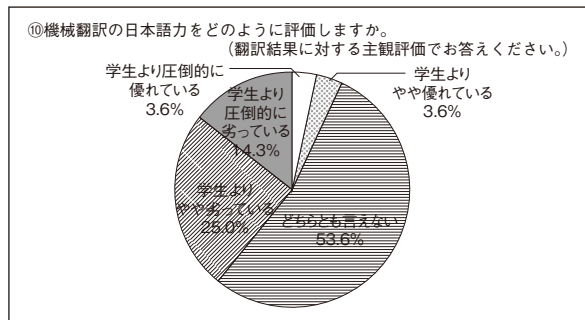


図8 MT vs. 学習者の日本語力

以下の2つの質問では、上の質問に対する回答をより具体的にするために一定の基準を設定した。質問は以下のとおりである。「以下の機械翻訳によって生成された日本語の文章をみて、学習者の現時点の日本語作文能力と比較してみてください。そして、機械翻訳の日本語力をどのように評価しますか。(翻訳結果に対する主観評価でお答えください)」。この2つの問題を通して、メジャー言語、つまり話者人口が多く、幅広い地域で話されている言語とマイナー言語、つまり話者人口が少なく、限られた地域で話されている言語によるMTの出力の差も確認することが目的である。以下では、MTへの入力となる文章はメジャー言語である英語の文章である。



図9 英日翻訳の機械翻訳例（評価サンプル）

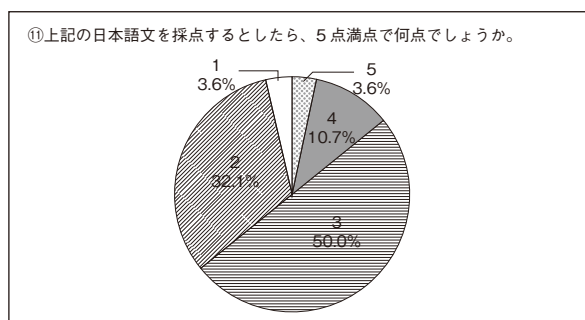


図10 英日翻訳の採点結果分布

ここでは、評価基準に厳密さが欠けていて、すべての回答者の評価基準が一定であったとは言えないとしても、回答結果は非常に興味深いものである。3点以上と評価した教員が大半であった（5点1人、4点3人、3点14人合計18人=64.3%）。学生の立場に立てば、MTを使えば作文などの授業の単位が取れてしまうとも考えられるかもしれない。現実的にはそうとは言えないまでも、教員としては、学生がこの程度の日本語の文章を書けるのであれば、条件次第では作文などの科目で合格点以上が与えられると考えていることは、ある程度確認できた。

以下では、マイナー言語であるシンハラ語原文日本語訳文の評価を示す。メジャー言語であった英文から翻訳した日本語文よりマイナー言語であったシンハラ語から翻訳した日本語文のほうの評価が良いことが非常に興味深い結果である。4点以上と評価した教員が半分であった（5点1人、4点13人、合計14人=50%）。3点と評価した教員も11人いた。また、1点と評価した教員は1人もいない。この結果によって、必ずしもメジャー言語の場合は良い出力になり、マイナー言語による出力は悪いとは限らないことがわかった。



図11 シンハラ語文日本語訳の機械翻訳例（評価サンプル）

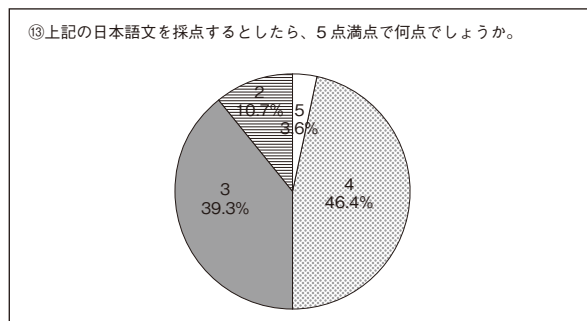


図12 シンハラ語文日本語訳の採点結果分布

1990年頃からのMTの「仕組み」の改善に起因するという。中岩（2016）によるとMTの精度

が上がったのは「ルールベース翻訳¹」という仕組みから「統計翻訳²」という仕組みに変わったからである。当初、統計翻訳は対訳データ量の不足によって計算に時間が掛かり、精度に大きな変化がなかった。しかし、現在は、Web の登場によって各言語の大量の対訳データが流通し、コンピュータの精度も上がったため、高速処理が可能になり MT の精度がかなり上がっているという。また、統計翻訳では、単語の意味だけでなく接頭辞や語幹、単語の位置なども考慮し、自然な文の流れを分析して翻訳できるようになっているため、各言語の特徴への対応が以前に比べて向上しているという。

このことについてはさらに複数のメジャー言語とマイナー言語を比べてみる必要があると思われる。今回使用したマイナー言語は、筆者の母語であるシンハラ語であるが、このことから、シンハラ語が話されるスリランカの日本語教育現場で MT を導入による学習方法を検討する大きな余地があると考えられる。

4.4 MT の日本語教育への利用に対する意見

複数の母語を持つ日本語学習者が集まる留学生センターの授業での MT 使用について教員の意見を調べたく、「複数の母語を持つ日本語学習者が集まる日本語の授業で、機械翻訳を活用できると思いますか。なぜそう思うか、その理由も教えてください。」という質問をした（図 13）。「そう思う」「ややそう思う」の回答を足すと 10 人（35.7%）で、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の回答を足した数も 10 人（35.7%）だった。この結果によると、MT は使用できると思う教員もいる一方で、使用できないと思う教員も同じぐらいいることがわかった。そして、まだ実際に MT を授業で使ったことがない教員が多いため、そして、MT の効果をはっきり分からないため、「どちらとも言えない」という回答が多かったと思われる。日本語を教えるために MT を使ってみたい教員が 28.6% で、その他（適切に使いたい教員が）10.8%（図 5）MT は日本語教育に役立つと考えていると思われる。

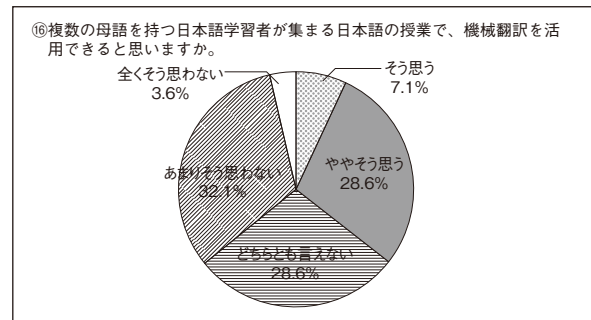


図 13 MT 使用可能性

MT の使用可能性について、自由記述で回答してもらった教員の意見を、「上手な使い方、指導法」「MT を使いこなす教育」「MT の欠点」の 3 つに分類し、まとめた。以下に、回答でなされた記述をそのまま掲載する。

4.4.1 「上手な使い方、指導法」

- 例えば「作文」や「文章表現」の授業で、目的に合わせた語彙や表現を使って書くことの大切さを教える際に、辞書や機械翻訳に頼りすぎると、不適切な語彙や表現を選んでしまったり、できあがった文章が「悪文」になってしまう事例を紹介するのに、とても便利だと思う。
- 各自が MT で作業をした後で、MT で翻訳されたそれぞれの日本語を全体で共有し、ディスカッション等を行えば、活用できると思う。
- 教師の説明を多国籍の学生に理解させたい時、補助的な役割が果たせるのではないかと思います。
- 複数の母語が集まるクラスの場合、共通言語は日本語になるので、学習者が理解できないよりできるリソースを最大限活用していいと思うから。
- 伝えたいことを伝えるため。また、ストラテジーとしては持っていてもよいコミュニケーションスキルだと考えるため。
- MT が Mediate するから。
- 多国籍クラスの場合、日本語が共通語となるためコミュニケーションに役立つ。
- 大雑把な意味の共有ができるから。

4.4.2 「MT を使いこなす教育」

- 単語の意味を調べる程度ならよいと思う。
- 文レベルではなく、語彙の意味を調べる時には有効だ。
- 学習初期で高度な内容を話し合う際に、ある程度の内容の共有ができるから。
- 単純な語彙の意味を調べる等では役立つかもしれないが、文章となると翻訳された日本語の不自然さを学習者が感じられるレベルであればよい。
- 学習者がつまづいた時に MT を使用することで学習が進む。

4.4.3 「MT の欠点」

- 学習の一部助けにはなると思うが MT に依存するのは良くないと思うから。
- 便利な面もあると思うが、MT に頼ってほしくない。
- 各言語（母語）の訳語が適切な日本語ではないことが多いから。
- 翻訳そのものに間違いがあり、その説明に時間がかかるから。
- 文章や会話に合った語彙が表示されているか心配になるから。
- 今まで受けていた教育レベルなどによって理解度が異なるため。
- 必ずしも母語の意味するものと合致するとは思わないから。
- 学習者が MT に頼ってしまうと、学習意欲が維持できないと思われるため。（「複数の母語を持つ学習者が集まる」ということとはあまり関係のないような気がします。）
- 翻訳の正確さが使用言語によって違うから。翻訳機に頼ると、今見てきたよう言いたいこと、趣旨は伝わるものの、日本語として見た場合非常に違和感のあるものとなり、その人の人柄や感情が伝わりにくいから。

自由記述の回答から、MT は語彙・表現を教えるのに役立つ、ディスカッション授業で学生同士の交流が深められる、教員とのコミュニケーションツールとして使用できる、機械に頼りすぎることの悪影響を教えられるなど、様々な有効性に気づ

いた教員が少なからずいるということが明らかになった。一方、今まで MT を使ったことなく、利点が分からないため使わないという教員もいることも確かである。さらに、「MT の欠点」を述べている教員の回答では、最初に MT の利点を一言述べてから欠点を述べることが多く、多くの教員が MT を日本語教育にまったく役立たないものとしてとらえているわけではないことがわかる。

まとめ

今回実施したアンケートは日本の留学生向けの日本語教育における MT の使用の現状を把握することが目的であった。以上の結果により、日本語教育現場での MT の使用とそれに対する教員の意見の一端が明らかになった。アンケートの回答は単なる逸話的な証拠や仮定をするための根拠となるのにとどまらず、授業改善のための MT 導入施策を立てる根拠となり得ると思われる。

また、本研究の結果を総合すると、日本語教育現場で MT を使用している教員が現状、非常に少ないが、今後使ってみたいと考えている教員が多いことが明らかになった。また、教師自身は教室内で MT を使用しないけれども、学習者たちは自発的に MT を日本語学習に使用していると考えている教員が多かった。メジャー言語入力による日本語の出力の評価が良く、マイナー言語入力による日本語の出力の評価が悪いと思っていたが、それとは逆の評価がなされたことが非常に興味深かった。現在、MT はそれ自体が著しく発展しているのと同時に、以前と違ってマイナー言語間の翻訳の精度も良くなっていると考えられる。しかし、多くの教員は MT が良い学習補助ツールだと思う反面、MT による教育的対応を成功させるには、学習者が MT を効果的に利用できるような教育がなされなければならない。さらに、MT の誤った利用は、学習における不正行為につながる可能性があるという懸念があることが明らかになった。そうならないように、今後、MT を導入した授業実践を行い、その成果を報告することには意義があると考えられる。

付録

MT と日本語教育に関する意識調査

日本語を母語としない日本語学習者（留学生など）に、日本語を教えている先生方を対象として、機械翻訳に関する意識調査を行っています。機械翻訳とは、コンピュータを利用して、原文を自動的に翻訳する Google Translate、DeepL などのエンジンのことです。アンケート実施によって集めた情報は、研究にのみ使います。できるだけお考えのとおりにお答えいただけますよう、ご協力お願い致します。

1. 以下の点についてお教えてください。

- ① 所属機関： _____
- ② 母語： _____
- ③ 国籍： _____
- ④ 教授年数： _____

2. 以下の点について該当するものに○をつけてください。

① 学習者の日本語力はどのぐらいですか。（複数選択可）

- a) 初学者
- b) N5 合格程度
- c) N4 合格程度
- d) N3 合格程度
- e) N2 合格程度
- f) N1 合格程度

② 日常生活で機械翻訳を使っていますか。

- a) 頻繁に使う
- b) ときどき使う
- c) たまに使う
- d) あまり使わない
- e) 全く使わない

③ 日本語の教室活動のために機械翻訳を活用しますか。

- a) 頻繁に使う
- b) ときどき使う
- c) たまに使う
- d) あまり使わない
- e) 全く使わない

④ ③で a) または b) を選んだ方は、機械翻訳をどのような活動に使っていますか。

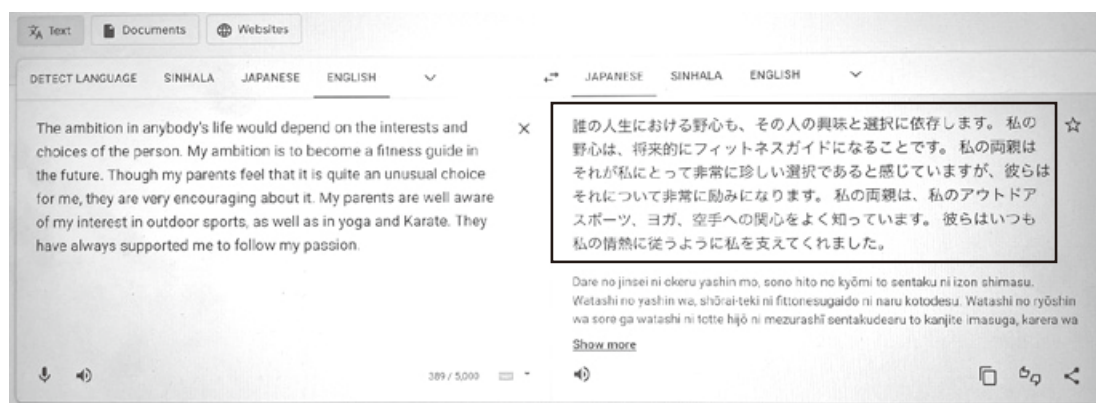
- a) 書く（作文など）
- b) 読む
- c) 聴解
- d) 発表する
- e) 翻訳
- f) その他 _____

⑤ 学習者は、日本語学習（自宅学習含む）の目的のために機械翻訳を使っていると思いますか。

- a) 頻繁に使うと思う
- b) ときどき使うと思う
- c) たまに使うと思う
- d) あまり使わないと思う
- e) 全く使わないと思う

- ⑥ 日本語学習の目的で、学習者が機械翻訳を利用することについてどのように思いますか。
- 利用すべきだ
 - 利用を控えるべきだ
 - どちらとも言えない
 - その他_____
- ⑦ 日本語を教えるために機械翻訳を使ってみたいと思いますか。
- 活用してみたい
 - 活用したくない
 - どちらとも言えない
 - その他_____
- ⑧ 授業のために機械翻訳を使うとしたら、どのような活動に使いたいですか。
- 書く（作文など）
 - 読む
 - 聴解
 - 発表する
 - 翻訳
 - その他_____
- ⑨ 母語が異なる留学生が、彼らの母語で入力し日本語に書き換える場合、機械翻訳の日本語は信用できますか。
- とても信用できる
 - ある程度信用できる
 - どちらとも言えない
 - あまり信用できない
 - 全く信用できない
 - 学習者の母語によって異なる

以下の機械翻訳によって生成された日本語の文章をみて、学習者の現時点の日本語作文能力と比較してみてください。そして、以下の質問にお答えください。この場合、機械翻訳への入力となる文章は英語の文章です。

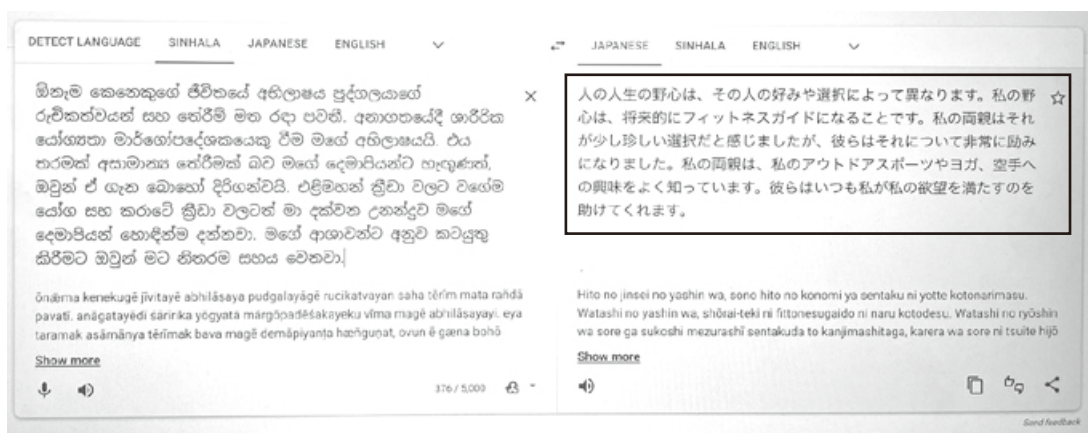


- ⑩ 機械翻訳の日本語力をどのように評価しますか。（翻訳結果に対する主観評価でお答えください。）
- 機械翻訳は学生より圧倒的に優れている
 - 機械翻訳は学生よりやや優れている
 - どちらとも言えない
 - 機械翻訳は学生よりやや劣っている
 - 機械翻訳は学生より圧倒的に劣っている

- ⑪ 上記の日本語文を採点するとしたら、5点満点で何点でしょうか。なぜその点数になるか、その理由も教えてください。
- 5
 - 4
 - 3
 - 2
 - 1

機械翻訳による訳文をこのように評価する理由もお教えてください。(必須)

以下の機械翻訳によって生成された日本語の文章をみて、学習者の現時点の日本語作文能力と比較してみてください。そして、以下の質問にお答えください。この場合、機械翻訳への入力となる文章はシンハラ語の文章です。



- ⑫ 機械翻訳の日本語力をどのように評価しますか。(翻訳結果に対する主観評価でお答えください。)
- 機械翻訳は学生より圧倒的に優れている
 - 機械翻訳は学生よりやや優れている
 - どちらとも言えない
 - 機械翻訳は学生よりやや劣っている
 - 機械翻訳は学生より圧倒的に劣っている
- ⑬ 上記の日本語文を採点するとしたら、5点満点で何点でしょうか。なぜその点数になるか、その理由も教えてください。
- 5
 - 4
 - 3
 - 2
 - 1

機械翻訳による訳文をこのように評価する理由もお教えてください。(必須)

- ⑭ あなたが教える生徒たちの母語はなんですか。
- ⑮ あなたの生徒の母語から日本語へ変換するの機械翻訳は、日本語教育に役立つと思いますか。
- そう思う
 - ややそう思う
 - どちらとも言えない
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない

- ⑯ 複数の母語を持つ日本語学習者が集まる日本語の授業で、機械翻訳を活用できると思いますか。なぜそう思うか、その理由も教えてください。
- a) そう思う
b) ややそう思う
c) どちらとも言えない
d) あまりそう思わない
e) まったくそう思わない
- その理由もお教えてください。(必須)
-

3. 以下の点について、あなたのご意見をお聞かせください。

- ① 機械翻訳を使用した学習課題の評価について。
-

- ② 機械翻訳の日本語教育への利用について。
-

アンケートは以上です。

ご多忙中、ご協力に感謝いたします。ありがとうございました。

¹ 「この単語はこう訳す」というルールを機械に登録し、そのルールに沿って翻訳していく仕組み。

² 大量の対訳データを解析し、その統計結果から適した訳し方を割り出す仕組み。

参考文献

【欧文文献】

- Clifford, J., Merschel, L., & Munné, J. (2013) “Surveying the landscape: What is the role of machine translation in language learning?” @*tic revista d’innovació educativa*, vol.10, pp.108–121.
- Jolley, J. R., & Maimone, L. (2015) “Free online machine translation: Use and perceptions by Spanish students and instructors” In *Moeller, A. J. (Ed.), Learn languages, explore cultures, transform lives*, pp.181–200
- Wiz, Charles and Bill White (2019) “Does machine translation impact L1 and L2 writing? And does it matter?” Paper presented at JALT CALL 2019, Aoyama Gakuin University.

【和文文献】

- 文化庁文化審議会国語分科会 (2019) 「日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告案) 改定版」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/nihongo/nihongo_92/pdf/r1413911_04.pdf (2022年10月26日閲覧)
- 中岩浩巳 (2016) 「Google 翻訳の精度はなぜ上がった? どんなしくみ? 翻訳者はもう不要?」
<https://ej.alc.co.jp/entry/20161220-it-translation> (2022年10月26日閲覧)
- 田村颯登・山田優 (2021) 「外国語教育現場における機械翻訳の使用に関する実態調査: 先行研究レビュー」『MITIS Journal』, 2巻1号, 55–66.
- 山田優・ラングリッツ久佳・小田登志子・守田智裕・田村颯登・平岡裕資・入江敏子 (2021) 「日本の大学における教養英語教育と機械翻訳に関する予備的調査」『通訳翻訳研究への招待』No.23

The Potential of Introducing Machine Translation into Japanese Language Education: Use and Perceptions by Native Japanese Instructors

BALASOORIYA Udani

Abstract

The recent development in the IT field has brought about unprecedented changes in both teaching and learning second languages. Especially, with the recent improvements in accuracy as well as fluency of MT, most instructors of foreign language education have started discussing on how to deal with MT in their classrooms. However, not much research has been conducted investigating the use of MT in relation to Japanese language education in Japan.

Accordingly, this article reports the results of a survey-based study on the use of MT as well as attitudes, perceptions, and beliefs about MT, held by native Japanese instructors within Japanese language programs at the University. The results of the analysis reveal that, a very few instructors use MT in Japanese language teaching currently, but many would like to use it in the future as the accuracy of MT outputs may surpass what students are able to produce on their own. MT may be regarded as a necessary tool for students, especially when they are placed under pressure to keep pace with privileged and more-able peers in the language learning classroom. Assessments of MT outputs indicate that there is no considerable gap between major and minor language outputs and it reveals the possibility of using MT in multilingual Japanese classrooms. Japanese instructors' responses with regards to the classes that they wish to use MT reveals that there is more possibility to use MT in essay writing classes than others. However, it becomes clear that while many instructors think MT is a good learning aid, they worry that learners must be trained for an educational use of MT, since incorrect use of MT could result in academic dishonesty.

This paper is organized as following: Section 2 provides an overview of previous research conducted on issues central to the present project. Section 3 summarizes the methodology used in the study. Section 4 presents and discusses the survey results relative to the research questions. Conclusion summarizes the attitudes, perceptions, and beliefs about MT by Native Japanese instructors and finally discusses the issues to be addressed in the future.

(2022年11月1日受理)